

『おらが春』所収句全注解(五)

黄色 瑞 華

凡 例

- 一 本稿は、『おらが春』所収句（一茶三三二、他三二）の全注解である。
- 一 一行めに、『おらが春』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（ ）に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊦として、初出及び他書に所収の有無を注した。
- 一 句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上主要な注は▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

〈承 前〉

魚どもや桶としらで門涼ミ

一茶

㊦ おらが春初出

▽ 七番日記（文化12・6）、「魚ども八桶としらでや夕涼」、句稿

消息、中七以下「桶としらで夕涼み」。八番日記（文政2・6）、

「おどる魚桶とおもふやおもはぬや」。七番日記（文化9・2）、

「六道」と前書して、「鳴田螺鍋の中としらざるや」。ほど拍子

（文政7）、「地獄」と前書して、「夕月や鍋の中にて鳴く田にし」。

九日集（文政8序）、「地獄」と前書して、「夕月や鍋の中にも鳴

田にし」。

注 「魚」、六道（迷界）にあつて、その自覚なき者（凡夫）の比喻。

以下「昼良や」まで、その無自覚が主題。

解 間もなく人に食される雑魚が、戸間口に置かれた桶の中で、夕涼みを思わせるように泳ぎまわっている。それを見て、あわれだと感じたのではなく、そういう情景にふれて「六道」に輪廻する凡夫の不明を見たのである。その無自覚なさだがあわれだということである。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「これも例の一茶一流の動物への愛の関

心である。莊子も言つた通り、誰か魚に非ずして魚の心がわからうぞ。生簀の魚、居る所狭しとは感じても居ようが、明日俎上のせられようとはまさに夢想しないであらう。あすの運命を知らず盛に遊弋してゐる魚に一茶は一掬の涙を注いでゐる」。勝峯『評釈』に、「此の句の趣向は既に『七番日記』に案じられて、『鳴くたにし鍋とおもふやおもはずや』で田螺は鳴くといふ。田から取られて今煮られるばかりの鍋の中で、その宿命を意識して鳴くのであらうか、どうか知らこの句から、八番日記の『おどる魚桶とおもふやおもはずや』へ、心理的な連綿を持ち、なほも『おもはずや』の反語に未練を残した上に、『おどる魚』には季語を取落して未定稿である。その季語を人事の『門涼み』と定めて、表現上の転向を試みたのである。『魚どもや』の呼び起しが、桶にとらはれながら、涼しく泳ぐ運命の儚なさを、無意識と知るが故にいつそう憐愍の情が強い主観がこめられてゐる」。伊藤『一茶集』に、「桶の中に泳ぐ魚を一茶の主観で門涼みと見立てたもの。今にも取られる命とも知らぬ魚の哀れさ」。川島『新解』に、「門涼みとあるので、さかな屋の店頭を思わせる。魚の背にチカチカと反射する灯影など想像されるが、この趣向は、八番日記に『をどる魚桶とおもふやおもはずや』とあり、なお遡って、七番日記に、『鳴田螺鍋の中としらざるや 文化九年』とある。これには『六道』と前書があるので、やがて煮られる苦悩を地獄道

のそれに擬したのであらう」。

考 この句『おらが春』第七話に添えた第一句。第七話は、信州須坂の中村某という医師が交尾中の蛇を殺し、それがたたって息子の三哲は生殖能力を失なってしまった。人々は、「是かの蛇の執念に、其家・血筋たやすらん」と噂した、という話である。この話に添えられた発句は四句（うち一句は大江丸）、短歌は二首（藤原光俊・源俊頼）である。

「魚ども」は、名もない小魚、雑魚の意であり、勝峯が言うように俎上に乗るほどのものではない。俎上に乗るほどのものなら鯉とか鮎とか固有の呼称があるはずだ。その雑魚が、桶に入れられて家の戸口か軒下に置かれている。桶の中に入れられているのだから、食用に捕獲されたものに相違ない。それがいかにも「門涼み」というふうである、というのである。

『七番日記』の前書に「六道」、『ほど拍子』『九日集』の前書には「地獄」とある。「六道」は、仏教でいう十界、すなわち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏のうち天（人界）までをいう。また、地獄・餓鬼・畜生界を特に三惡道といい、六道までが凡夫の迷いの世界（迷界）、声聞以上が聖者の悟りの世界（悟界）である。凡夫の迷界を解脱しなければ悟界に至ることはできない。その機は凡夫としての自身の自覚以外にはないのである。桶の中の雑魚にはそれがないのである。

とくかすめとくかすめ放ち鳥

㊦ 七番日記(文化7・3)

解 籠の鳥を空に放って、自由に飛べとうながしても、なかなか籠を離れようとしめない。仏の招喚の声を内感しえないで、迷界に流転する凡愚の姿をたとえる。

▼ 勝峯『評釈』に、「放ち鳥を八幡の放生会と見てはいけない。

放生会は陰暦八月に行はれる神事である。秋の季語である。此句の掲出された場所は夏季のやうであるが、季語は春の霞である。籠に飼つた鳥、或は葬礼の折などの放鳥籠から、自由な野へはなされた小鳥である。さつと逃げて行け。まご／＼すると、又誰かに捕まるその意と、かすめを再び重ねて補強してゐるのである」。川島『新解』に、「この放ち鳥を八幡放生会の行事と見れば秋季であるが、これは春季かすみの句で、飼鳥を放つか、あるいは、葬礼の折の放鳥であろう」「いずれにしても放つからには捕えられたくないと思うのが人情である。早く霞の中にとけこんでしまえ、早く、早く、鳥の行方と共に願望の引きずられていく思いが、得意の重語によって、時間的経過をもってあらわされている。高く高く、青空にかすみいく小鳥の姿が、刻々に視界から遠ざかっていくような印象を与える。巧みというよりも、小鳥に対する愛情のあふれている作である」。

考 勝峯、川島両者の解釈で一致するところは、「放ち鳥」は「葬

礼」の放ち鳥。「小鳥に対する愛情のあふれた」句ということになろう。「とく／＼かすめ」から春の句とし、八幡の放生会ではないとする、そこまでは説得力がある。だから「葬礼」の、というのはうなずけない。葬礼は季節にかかわらないばかりか、「とくかすめ」「とく／＼かすめ」の「かすめ」に、作者は勝峯や川島がというような伝統的季語、その趣味による一句統一の意識があったらうか。また、「放ち鳥」を、ただちに放生会や葬礼に結びつけようとするところにも無理がある。籠の口をあけて飛び立たせれば、それが「放ち鳥」であって、これは放生会や葬礼に限るものではなからう。

野鳥でも、しばらく籠で飼うと、翼が弱って、もとのように飛べなくなってしまう。そればかりか、籠の口をあけてやっても、なかなか飛び立とうとしないものだ。それはそれとして、この句も凡夫の不明をたとえたものであって、鳥そのものを詮索する必要はないのである。籠の口をあけて、さあ飛び立て、自由になれ、というのは仏の招喚の声である。雑行、雑修の心を捨てて、念仏せよ、という仏の呼びかけである。鳥がせまい籠を離れたとき、そこに解脱があり、その先に自由の世界(悟界)があるのだ。それがわからないから「不明」なのであって、それは自身の置かれた立場について無自覚であることに起因する。

彼岸の蚊釈迦のまねして喰^(せ)れけり

大江丸

㊦ 俳懺悔

▽ 前書、「百千万劫菩提種」。座五「喰せけり」。

注 「釈迦のまね」、その涅槃像のように、横になって。「彼岸」、秋の彼岸。

解 座五「喰せけり」を「喰れけり」と思い違えて、一句を釈迦ならぬ身の無自覚と解し、ここに引いたのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「彼岸は陰暦の二月で、仏滅の月である。釈迦の真似は涅槃の図によつて、寝釈迦の如く横臥することである。蚊もまだ鳴くばかりで、嘴もさして鋭くないから、一つや二つは平気である。さすなら整して見るがよい。と、侮つてその肌を、血を蚊の吸ふにまかせること、それが又、忍苦の修行になる意を言外に持たせてゐる」。川島『新解』に、「春季（彼岸・春の蚊）。実は秋季（秋彼岸・残り蚊）。春の彼岸は陰暦二月中頃に当るので、ちょうどその頃の涅槃会即ち寝釈迦をまねて、ごろりと横になつていたところが早出の蚊にくわれた、と一茶はこのように解していたかと思われるが、原句は「喰せけり」とあつて秋の部に入っている。前書を参考すると、釈迦の前身雪山童子が涅槃経の四句の偈（諸行無常、是正滅法、生滅々已、寂滅為樂）を得るために身を鬼神に与えたという故事にもとづいて、彼岸のことゆえ肉身を蚊に供養したという意のたわむれであろう。秋の部に入っているところを見ると秋彼岸で、残り蚊である。残り蚊の方が自然である」。

水ふね二うきてひれふる生け鯉の

命まつ間もせはしなの世や

光俊卿

㊦ 新撰六帖・夫木抄

解 食用として捕獲され、水槽に入れられた鯉。俎上に乗るまでのわずかな時間もいそがしく動きまわっている、の意。一茶は「せはしなく動く生け鯉」を、いつまでも名利を求めて奔走する人の姿の比喩と見た。これもまた「不明」のあわれ。

▼ 勝峯『評釈』に、「包丁で調理される時の迫つて、活殺寸前の鯉が、水ふね（槽）今の生簀のやうな飼ひ桶で、ひれ（鰭）を振りながら泳ぎあがるを見て、感傷的な人生観を詠じた歌である」。川島『新解』に、「調理寸前の鯉も、なお生ける限りはひれをふっている気ぜわしさを、その鯉にもたとえられるはかない人間が、世務に追われている姿とも通じていると見て、無常観を託したのである」。

ふしづけしおどろが下に住むは^(の)へ^(え)心^(を)おさなき身をいかにせん

俊頼卿

㊦ 散木奇歌集

▽ 「恨躬恥運雑歌百種」中の一首。第二句以下「おどろの下にすむはえの」。

注 「ふしづけ」、柴を束ねて水中に沈めておき、その下に集った小

魚を捕るための仕掛け。「おどろ」はその束の乱れたさま。「はえ」、淡水魚の鮠。「心をさなき」、凡愚の不明をたとえる。

解 「おどろ」の下に集った小魚・鮠。それが捕獲のための仕掛けともわからない、その不明をどうしたらよいのか、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「此の身の今は、水に沈めた柴（ふしづけ）の乱れはびこる（おどろ）下に、ひそみ隠れる小魚の鮠（はえ）にひとしく、宿運の拙なさに、思ひはかりの愚か（心おさなき）な成り果てを恨むばかりである。その鮠に似て、浮び出る望みのない世を恥づる境遇に置かれてゐる。もだえても、あがいても、せんすべのなき此の身を何うしやうぞ。かくあり／＼て落魄して行くより仕方のない、薄憐な此の身であり、此の世の宿運である」。川島『新解』に、「乱れひろがっている水中のふしづけの下に集っている小魚のはえのように、おろかな自分をどうしたらよいだろうかと、悲運を打開する術も知らぬ身のなげきを寓したのである」。

浅間山

昼良やぼつぽと燃る石ころへ

一茶

㊤ おらが春初出

▽ 『文化句帳』断簡（文化5・6）、「浅間山」と前書して「昼顔やけぶりのかゝる石に迄」。

解 「ぼつぽつと燃る石ころへ」蔓を伸ばせば、その先は焼けこげ

てしまう。ここでも凡愚の無自覚・不明にたとえた。

▼ 勝峯『評釈』に、「鳴り揺いで火柱を噴き、遠く灰を降らす、大焼の日から間のない頃、山のなだれの一とところで、照る日を浴びて、影を灼け土に曳く昼顔の花を瞪るやうに眺めてゐる。迸る火を貯へて石ながら燃える、磊々たる群落へ、その白い花が熱さにすぐむ蔓を強て匍はせるやうに、咲き進むかに見えるではないか。一茶の驚異は、『ぼつぽ』と、間歇的な火の溜息を感じる語となつて、昼顔の悲壮美をたゞへる此の一句をとらへ得たのである」。川島『新解』に、「標高八千尺、八合目以上は草木を見ぬ活火山浅間の山容を前書にはさみ出させて、山麓の熱気をさながらに感じさせる。木かげもない、水もない、やけ石ばかりの道。『ぼつぽと燃える』に、息苦しいまでの実感がある。しかも『石ころへ』に、やけ石からやけ石へ這いまわる昼顔のたくましい生命力を思わせる。浅間山は、暑さにつけ寒さにつけ、江戸と郷里との往復毎に、一茶の旅の艱難の意識をかき立てられるポイントとなっていたのである」。中島『一茶集』に、「浅間山の麓、焼け石の間をはいまわる昼顔の生命力」。

俳諧宗雲水に送る

鬼茨も添て見よ／＼一涼、

、

㊤ 八番日記（文政2・5）

▽ 八番日記、中七「添^うて見よ」。七番日記（文化14・9）、

「涼むならこんな茨にも添^うて見よ」。

解 鬼茨と毛嫌いせず邪見に見える人にも接してみよ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「鬼茨は慳貪で邪見な人を憎んで喩へたのだと見て、その下の『も』に妨げられて当惑する」「行脚に出たなら情け知らずに逢つて、その冷酷さを怨むことも起らう。それが修行のひとつである。ちつと、こらへ忍ばねばならぬ。そのころ構へて、鬼茨の刺々しい蔭にも、平気で接近して見るがいゝ。そこにはそこで又涼しい風が吹くであらう。一茶の体験は初雲水へ、門出のはなむけをかう語らせたのである」。川島『新解』に、

「鬼茨もいとわずに添うて見よの意。薄情な世間にも、邪見な人ごころにも、虚心にして接してみよ。そこにはまた、おのずからなる人情のやさしさがあって、涼風も吹いて来ようものと、後輩にさとしたのである。愚痴と皮肉の本案のような一茶の先輩面はいささか滑稽であるが、長い間貧しい旅の辛苦を経験して来た一茶の言として味がある」。中島『一茶集』に、「とげとげしいばらにも、寄り添うてみれば、思いのほか涼しいぞ。渡る世間に鬼はない」。

古之為^レスルハ 関^ヲ也、将^ニ以^テ禦^レガント暴^ヲ。
今之為^レスルハ 関^ヲ也、将^ニ以^テ為^レト暴^ヲ。

関守りの灸点はやる梅の花

一茶

㊤ おらが春初出

注 前書の上白に「孟子」と注記。孟子、尽心下篇からの抽出である。原本は「今之爲^{セントスルハ}」為^レ関。衍字に気付いて□で囲んだのである。「灸点はやる」、本来の灸ではなからう。ここでは通行人を痛めにあわせる、の意にとりた。

解 昨今の関守は本来の役目をおろそかにして、通行人を黷ること

に精を出す、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「この句を孟子の語に交渉があると見る時、峻烈な内容を見落せない。一茶は常に関守をどう観察したか。七番日記の「関守の声を真似るや枝の鵲」は、疍高な鵲の叫びのやうな関守の怒声を思はせるでないか。八番日記の「関守が叱り通すや猫の恋」も、叱られるのは猫でなくて旅人なのだ。関東では『入鉄砲に出女』が関所の標語であつた。身分ある女駕も乳をさぐらせないと乗打は許さぬ。そんな場合、駕に觸れる手にそつと握らせると、難なく黙つて通したさうである。袖の下のつかへない旅人には灸だ。叱る、詰る、難癖の灸をすゑるのである。灸点はその暗喩であらう」。川島『新解』に、「これを孟子の章句と関連させて考えると、意味はちがってくる。すなわち、役目外の灸点によって、こっそり札物をせしめる、というのは、実は役目を笠に着ておどして金をとることが流行しているとも解される。ひどい目にあうことを灸をすえられるともいうので。事実、当時は封建の紀綱もゆるんで、関守が通行人から袖の下を受けて便宜を

計るといふようなことも、常識化されていたようである」。

人声に子を引かくす女鹿かな、

㊤ おらが春初出

▽ 茶翁聯句集に、「鹿の子の題をとりて」と前書して、「鹿の親笹吹く風にもどりけり」。真蹟（享和元・六、関之との両吟歌仙）に、「鹿の親草吹く風にもどりけり」。御桜に、「親鹿は草吹く風にもどりけり」。希杖本句集に、「鹿の親篠吹く風にもどりけり」。

解 警戒心の強い鹿、それが子連れとなって一層顕著になった。

▼ 勝峯『評釈』に、「子を覘はれてはと警戒的に直覚する母鹿は、きと人声のする方角へ緊張した顔を向け、身を以てその子をかばふのである。鹿の母性愛である」。川島『新解』に、「この句が実情をよんだものとすれば、やはり奈良あたりの保護されている鹿であろう。野性の鹿の子など普通には見られるものではなからう。人馴れている鹿でも、子を守るために神経が鋭くなっているのである」。

はつ螢其手ハくはぬとびぶりや、

㊤ おらが春初出

▽ 七番日記（文化7・5）、「とぶ螢うはの空呼したりけり」。同（7・8）、「敷陰も湯が候とぶ螢」。同（10・6）、「我声が聞へぬかして行螢」。八番日記（文政2・8）、「敏声の其手はくはの」。

螢かな」。

注 「其手」、「ホ、ホ、螢コイ。アッチノ水ハニガイゾ。コッチノ水ハアマイゾ。ホ、ホ、螢コイ」の童唄をさす。増補『俚言集覧』に、「江戸の小児、ほウたるこゐ、山路こゐ、あんどひのひかりでちヨいとみてこゐといふ」。

解 「ホ、ホ、螢コイ」の呼び声に、近づいて来たと思われた螢が、ついと方向を変えて飛び去っていったのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「ほうたる来い、ほうたる来い。可愛い声で呼ぶ。優しい白い手で招く。あやしつ、すかしつするが、初螢でまだ瞞されたこともなからうに、ついと横にそれて、人の子、人の母のあまやかしの手には乗らない。その手はくはぬが一茶の発想である。此の句の動機となつてゐる。八笑人に『ヲット、其手はくはねへ』だの、統膝栗毛に『イヤ、その手はくはねへ』とか^落彌次郎口の『もう、その手はくはぬ』と云風に、軽口の俚諺に使はれ、相手の手だてを見抜いて、瞞されない、敏感な警戒語である」。川島『新解』に、「ホーホー螢こい、そっちの水はイがいぞ、こっちの水はアマイぞ——どっこいその手はくわないう、ここまでおいで甘酒進上と、子供等の竹箒の先をツイとそれていく。初夏の宵闇のたのしい情調である」。

蓮の花少曲るもうき世哉、

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記（文政2・6）、「咲花も此世の蓮はまがりけり」。

注 「蓮の花」、ここではその花をささえる茎。周敦頤の「愛蓮説」に、「蓮ノ淤泥ヨリ出デテ染マラズ、清漣ニ濯ハレテ妖ナラズ、中ハ通ジ外ハ直ク、蔓アラズ枝アラズ」（古文真宝）。

解 蓮はその茎をまっすぐ伸してこそ尊ばれるのだが、それが少し曲っているのもこの浮世にあってこそ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「浄土の花とたゞへられる蓮も、不正なこと、不正なものゝはびこる此の世では、真直に咲けず、こゝろならずも托葉ぐるみ曲り傾いて咲く。蓮の本心には憂きことに違ひない憂きを、浮世のうきに言掛てゐる」。

（界限）
 界限のなまけ所や木下闇

㊤ 八番日記（文政2・6）

▽ 八番日記、上五「界限の」。七番日記（文化12・6）、中七「縄なひ所や」。

解 こんもりと葉の繁った木陰、夏の陽光をさけて涼をとる者、そこへ寄って来てたわいもないことを話し込む者、けっこうな「なまけ所」である。

▼ 勝峯『評釈』に、「籤でより出したやうに、どの家からも一人づつ、毎日揃へる訳ではないが同じ顔である。一ト繋がりの聚落の見るから涼しい背景の緑林である。闇とはいっても、光線は樹の隔てから枝のすきから射して、たゞ薄ぼんやり暗いだけである。

日盛でもこの翠の洞に暑さの這ひよらないのも、ひとつは此の暗さが冷えを湛へるからである。昼休みの一服が午睡となり、無駄話となり、同じ顔の同じなまける場所のこゝは、時に『界限の縄くり所や木下闇』の仕事も、涼みがてら持ち込まれて、なまけ者のいい口実と申し訳になる。川島『新釈』に、「この木下闇には陰気な感じはない。木立が茂って深いかけを落しているの、よい憩い場となっているのである。そこへ誰かがやって来ては、心地よいままにツイ話し過ぐす、結局は仕事の能率をさげることになるのを、なまけ所と言ったので、例の逆叙的な手法である」。

大沼

萍の花からのらんあの雲へ

㊤ 八番日記（文政2・5）

注 「大沼」、享和句帳にも「羽州大沼を題して」と前書して、「浮島について来よかし閑古鳥」とあるから、これも羽州（山形県）の大沼と見てよからう。『東遊記』に、「此神のみたらしの大池あり。大沼と名付く、池の形、大の字に略似たる中に島ありて、其島時々水面を遊行す」とある。矢羽「岩波文庫」は、「志賀高願のほぼ中央にある。周囲約五キロの湖。一説に山形県西村山郡の大沼」と注。

解 広々とした湖面に浮ぶ「浮草」、その花の上から蝶のように青

空の白雲に向って飛び立ちたい、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「前書に大沼とあるが何処のことか判りません。固有名詞であるか単に広い沼の意でありませうか。萍の花と云ふと水の上の根もなく浮いてゐる草の細かい花で、大きな沼の汀などには幾らも漂ふてゐるのです。この句は、さうした萍の花の漂ふてゐる沼に雲も白く影を漂はしてゐる、その沼辺に立つた作者はふと頭にあの漂渺とつゞいてゐる萍の上から雲に飛び乗つてみやうと考へたもので——桜の花などがよく雲のやうに咲いてゐるやうな、さうした桜の花などから雲の上へ乗らうとするのでなく自分達の昨日は東、今日は西といふ如き生活にも譬へられる浮草の花の上から浮世を離れたあの雲の上へ乗りたいといふ心持ちを以て詠じたものと解釈される」。

越 後

柿崎やしぶく鳴の閑古鳥

④ 七番日記（文化12・8）

▽ 七番日記、座五「かんこ鳥」。八番日記（文政2・7）に重出。

注 七番日記（文化11・5）、「十二晴 妻二倉行 越後柿崎洪々各号於妙専寺開張」同十五日、「開帳終」。「柿崎」は、現新潟県中頸城郡柿崎町大字柿崎。越後にあった親鸞がこの地に来て、一夜の宿を乞うと、その家の主人は不承知。やむなく、軒下を借り

て休む親鸞の念仏の声によって改心、家に招き入れて教化されたという。翌朝、記念のしるしを乞う夫妻に、十字の名号を与えて立ち去ったという伝説をともなつて伝えられる伝親鸞作の「カキ崎ニシブく宿ヲカリケルニ主ノコ、ロ熟柿トゾナル」（親鸞聖人正統伝）をふまえる。この歌、『御旧跡二十四輩巡拝記』『押聚抄』『親鸞聖人遺徳法論集』などにも見える。また、この伝統は当地の浄善寺・浄福寺（ともに浄土真宗本願寺派）に伝わる。

解 さすがに洪々の名号が伝えられる柿崎、閑古鳥も洪々声をたてているよ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「曇り空の山簷などへ、ふくみ声を飭させて閑古鳥の鳴く夏になつた。明専寺で開帳のしぶく名号を拝んでは、柿崎で親鸞聖人の詠まれた歌をなつかしく偲び申す。閑古鳥を聞くと殊にその感懐が深くなる。柿崎ではあの名号とあの歌とで、閑古鳥までクワツコウからすぐクワツコウと鳴きうつるところを、すこし間をおいて鳴き洪つてからでない、あとの声は出ないであらうと云ふ一茶の聖人の遺徳を慕ふ心の中にも、俳諧的立場を忘れない句である」。川島『新解』に、「柿崎の縁と、伝統にもとづいて『しぶく』と言ったのである。ただ、間をおいて鳴く閑古鳥の音に深い寂しさのあるのが、『しぶく鳴』とややふさわしい感がある」。

江戸住居

青草も銭だけそよぐ門涼

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記（文政2・6）、「江戸住人」と前書して、「銭なしは青草も見ず門涼み」「暑日や青草見るも銭次第」。

解 何事も金次第の江戸生活、門先に置いた青草の鉢物も、その価格だけというそよぎようだ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「江戸は暑い。水売から手桶で何文といつて買はねばならぬ」「江戸では草までが銭の値を知つてゐる。それでも涼みのたしにはなるのだ」。川島『新解』に、「一日の炎熱から解放されて、微風をたのしむ門涼みに、わずかに目をなぐさめる鉢物なども、十文は十文だけ、二十文は二十文だけの大きいなり美しさなりを持っている。あらゆるものが銭に換算される都市生活のきびしさを、貧しい一茶なればこそ、田舎者一茶なればこそ、特に身にしみじみと感じたことであろう」。

なでしこに二文が水を浴せけり

㊤ 八番日記（文政2・6）。上五「なでし子に」。

解 一荷二文というとうとい水を撫子に掛けてやったのである。

▼ 勝峯『評釈』に、「これも江戸の夏だ。撫子を苦勞して咲かせたが、水つ気がないから、日に灼けてぼそくと、いちけた花で

ないか。凜と咲け、それやるぞ。しやんと立て、そら、おまけだ。もう一杯。なんて調子にのつて、たつぷり浴びせかけたら、二文がところ、折角の水をからにしたのではないか。水売りは廻つたあとだし、よわつたぞと後悔するものゝ、撫子のいきゝしやんと生きかへつた花を見ると、銭も惜しくはない。いゝ気持ちになる。——一茶の懐旧である」。川島『新解』に、「なでしこにかけてやる水も銭の欠けら、おそらく二文で買った水の一部であることに、前句（注、青草も銭だけそよぐ門涼）以上に切実な、いわゆる石の上の生活の実感がにじみ出ている」。

小金原

母馬が番して吞す清水哉

㊤ 八番日記（文政2・6）

注 「小金原」、千葉県東葛飾郡にあった原野。官馬が放牧されていた。『寛政三年紀行』三月二十九日の条参照。

解 広い放牧場、草かげから湧出る地下水に子馬が口を寄せる。その傍に、その母親らしく思われる馬が付き添うように立っている。

▼ 勝峯『評釈』に、「涼しい樹蔭などに、ちよろゝ青草を浸して清水が澄んで、涼のやうな浅さを湛へてゐる。放し飼の馬群をやゝはなれて、大小の馬の影を写す。大きいのは母馬である。きつと、たてがみを立てゝ、みじろぎもしないで佇んでゐる。小さい

のは子馬である。乳房にも吸ひ厭きて、清水へ、鼻をひたして、小さい肚に泌みる冷めたさを貪つてゐる。その間、母馬の見張する風景である。『番して』とだけで、子馬をあらはさず、然も『吞す』のは子馬に疑ひない叙法は一茶の特意とするところである。川島『新解』に、「一連の親馬子馬の愛情の世界と見られる」。

風あるをもつて尊ふとし雲の峰

㊤ 梅塵本八番日記（文政2）。上五「風有を」。

▽ 風間本八番日記（文政2・6）、座五「きのふね」。

注 『実語教』の章句「山高故不貴、以有樹為尊」による。

解 雲は高きがゆえに尊いのではなく、涼やかな風をはらんでいるがゆえに尊いのだ、の意。注参照。

▼ 川島『新釈』に、「蒼空の彼方に、雪白な山のやうにむくく」と立つ雲の峰。それが若し固定したもの、動かないものならば、私達の眼にペンキ塗の背景のやうに味なく映るであらう。試に、偉大なる雲の峰に対して深く眼を止めて見ると、動くでもなく動かないでもなく、殆ど静止状態にありながら、然も絶えず形を変へて、崩れ、折り、光り、或は離れ行く。その動くといふ説明を避けて、『風あるをもつて』といふやうな間接的な辞句を置いた作者の句作用意は味ふべきである。勝峯『評釈』に、「季節の雲の峯は晩夏である。季節的に見て、風の背景を感じた一茶の感覚は鋭いが、『尊し』で概念的になる」「陋室銘の『山高キニ在

ラストモ、僊アレバ則チ名アリ」古文真宝後集の此の語を諳ンじてゐた上に、実語教の『山高キガ故に貴カラズ、樹有ルヲ以テ貴シト為ス』を連想して、此の『貴し』を風に転じたのであらう。川島『新解』に、「夏時の空に団々と立ちのぼる雲の峰の偉観ばかりを賞さずに、『風あるをもつて』と、くずれ変っていく形相により多く興味を見出しているところに、一の境地がある」。

瘧病神蚤も^(疫)肩^(負)せて流しけり

㊤ おらが春初出

▽ 八番日記（文政2・6）、中七「蠅もお^(は)わせて」。七番日記（文化13・6）、「形代に虱おぶせて流しけり」。

注 勝峯『評釈』に、「疫神は陰陽道で古くから云ひ出され、馬に乗つて路傍の道陸神を案内にさせたなど今昔にもあるが、疫神送りは後世行はれたので、塩尻に京では『組を定めて人形を作り』これを数十人で、金づゝみにして夜送る記事が見え、東海談には江戸に悪疫が猖獗し、薬作りの疫神を海に流すことがはやつたが、宮ではこれを黙認したとある。一茶も上総の布佐で目撃した。七番日記の文化七年三月二十九日『布佐村に入る。神輿大小二つかき出して、阿波大杉大明神、悪魔を払つて、よいや、と、笛太鼓にてはやして、さらに祭のさまをなす』と手記し、そのいはれを『此里、疫神の流行なる物からかくする』と云つてゐる」。

解 疫病よけの薬人形に、疫病並みにやっかいな蚤も負わせて川へ

流すのだった、の意。「蚤も負せて」に俳諧性がある。ただし、これは「形代に虱おぶせて流しけり」(七番日記)の改案。

▼ 勝峯『評釈』に、「疫神を藁で編んで人形に拵へ、鉦、太鼓ではやし立てながら、大勢で取囲んで追放する。一茶は『吾宿の貧乏神もお供せよ』の句を詠んでゐるが、それは十月の神送りである。疫神送りは蚤をあしらひに使つてゐるので夏である。八番日記には『蠅』とあるが、嫌はれものゝ蚤の方が疫神の肩に負せて遣る図に向く。川島『新解』に、「この構想は早く水無月祓いにも見られるもので、『形代に虱おぶせて流しけり』(文化七年)とある。いろいろこねかえされた題材の一であつたことが知られる」。

茂林寺

蝶くゝのふはりととんだ茶釜哉

㊤ 八番日記(文政2・5)。上五・中七「てふくゝのふわりととんだ」。

注 「茂林寺」、群馬県館林市にある曹洞宗の古刹。文福茶釜の伝説で知られる。館林では、モウリンジと呼ぶ。「とんだ茶釜」、明和・安永のころ、江戸谷中笠森稲荷の水茶屋の娘おせんが駆落ちした後、老父が代わって店に出るようになったので、「飛んだ茶釜が葉缶に化けた」という地口が流行したという。『半日閑話』『柳庵

随筆』に見える。いま『柳庵随筆』を引いておく。「安永六酉年笠森稲荷境内水茶屋の娘を、笠もりおせんとして評判たりし。また、其のち浅草観音堂うしろ楊枝店の女を銀杏娘と呼て名高し。また、後に山下水茶屋の娘を、とんだ茶釜といひふらす云々」里のおだ巻評。(割注) 安永三年甲午の秋。近き証拠は、山下にとんだ茶釜と聞えしは、ひと比の大評判。能々きけば、吉原にて何とかいへる女郎なりしが、吉原にゐた内は、木の十把一からげ、左して目に立事なし。廓外へ押出せば、掃溜の鶴、砂中の金、飛んだ茶釜のほり出し者と大評判に及びし云々」後見草。此笠森おせん欠落して、茶みせに老翁出て居るとて、とんだ茶釜を葉缶とばけたといひし云々。(割注) 此三節みな同時の人の草記なれ共、その区々なることかくのごとし。(とんだ茶釜称覚譚)。

解

ふはりと「とんだ」に流行の地口「とんだ」茶釜を言いかけた。「茂林寺」は「茶釜」を引き出すために用いたのであって、茂林寺での作を意味するものではない。

▼ 勝峯『評釈』に、「茂林寺伝来の茶釜は、湯を沸かすと、ぶんぶんぐとたぎり立ち、水を一滴注ぎたさないでも、いくら汲んでも湯が尽きないから、文福茶釜と呼ばれたのだといふ。世間では昔々狸が化けたので、今も毛むくじやらの手足を出して踊るところがあるとかの評判に釣られて、見物に来たけれど、たゞの茶釜で狸の本性をあらはしさうもない。ふと蝶々が茶釜のあたりへきて、ふはり飛んでゐるのを見て、あの蝶々に操られて、ひよつと

狸が浮かれ出さぬでもあるまいと待構へたが、それもむだな望みでしかなかった。これこそ江戸ではやる、とんだ茶釜のとんだ目に逢つたものだ」。川島『新解』に、「意味は、茶釜が蝶のようにふわりととんだ、ということになる。蝶に季感を持たせ、とんだ茶釜という軽口を利かせて、狸が化けたとか化け狸がおいて行つたとかいう文福茶釜の本家茂林寺と結びつけたのである。蝶と茶釜との比重がおもしろく、季節が春先であることも浮き浮きとした気分を誘う」。

桜迄悪く云はする藪蚊哉

㊤ 八番日記（文政2・6）。中七「言する」。

解 北国の桜はおそく、藪蚊が出るころになって咲く。

▼ 勝峯『評釈』に、「そばへ行つたら無い、眺めだらうと思つて近寄る。藪がある。ふるに蚊がきて螫す。柄の大きい、出たての藪蚊で痛い。あとが赤く膨れる。あの桜を見に行くと考えいい目に逢ふぞ。藪蚊がある。その噂を立てられて桜こそいゝ迷惑である」。

「かう解するのは表面的で、実は性の悪い者があつて、善人にたかつて、よくない事ばかりする。善人を傷つける。その悪物を藪蚊に喩へて、諷刺する意を寓してゐるかも知れないのである」。

川島『新解』に、「桜と蚊では季節が合わぬが、春がおそく、桃李一時に開く北国の実情であるかも知れぬ。うっかり桜を愛でているうちに、たくましい藪蚊にチクリとやられた。その腹立たし

さから、こんなところに咲きおつてと、桜まで憎くなる気持。と、素直に解しておこう」。

蟻の道雲の峰よりつゞきけん

㊤ 梅塵本八番日記（文政2）。座五「続きけん」。

▽ 風間本八番日記（文政2・6）、座五「つゞきけり」。文政九・十句帳写（文政9）、座五「つゞく哉」。

解 延々と続く蟻の道。それはあの雲の峰から続いているのだろうか、の意。蟻の行列に、雲の峰という大胆・奇抜な着想に特色がある。

▼ 川島『新釈』に、「私はこの句から非常に悠長な、寧ろ気だるい気分を受取る。例へば、作者は青草の上にでもどつかりと腰を下して、遙の野の果てに立つ雲の峰にうつとりと見入つて居る。その眼を静かに静かに足許の草地に移すと、其処には、雲の峰と作者の視界を繋いで、倦むことない蟻の列が続いて居る。炎天の蟻の列は、時として人の心を焦燥に、時として空想に導いて行く。『続きけん』といふ推量と詠嘆を含む坐五は、蟻の列と共に曳かれて行く真夏の夢を思はせる」。勝峯『名句評釈』に、「蟻の長い行列を見ない人には、こうした句の味はほんたうにわからぬ。何処からどう出て来るのか無数の蟻が二三列になつて、何処から何処までも続いている。その路をつけて行つて見ても、何処から始まつて何処で終つてゐるかゞ分らぬ」「全く長い長い行列だ。之

を『雲の峰より続く』とはこれも奇想天外、一茶の発想の大膽なのにして無邪気なのに共鳴する。恐らくこれ以上の発想法としては無いであらう。暉峻『鑑賞』に、「都会ではあまり見られませんが、田舎へ行くと物凄いのが見られます。しかも大きな山蟻の列が、藪を越え、くさむらから抜け、めんめんと続いている。何処に始まり何処に終つてゐるのか計り難い。その計り難い思ひを眼前に聳ゆる雲の峰に結びつけた、一茶の大膽な幻想的なであります」。勝峯『評釈』に、「俗に蟻の観音参りといふ」「草をもぐり、本を繞り、岩を迂回してはてしもないが、あとから又あとから繰り出して行く。蟻よ、どこまで行く。蟻よ、どこから来る。あの遠い、高い、ぬつくり棒立のやうな雲の峰から、この道を歩きつづけてゐるのだらうか。雲の峰からどこへ、その焦点をあはせるものがないので、いよ／＼長い距りと、空間的存在を示唆するのである。『けん』の疑ひは、こゝに積極的な効果を持つことゝなる」。伊藤『一茶集』に、「蟻の行列の長いのを誇張した句」。川島『新解』に、「もくもくと立つ雲の峰が、はるかに作者の視界を占領している。野中の松の根方にでも憩うている作者は、うっとりした目を静かに足もとの草地に移すと、そこには雲の峰と作者をつないで、倦むことない蟻の列がつづいている。日はんかんかと照りつけているのである。もうろうとなつて作者の意識は、しばらく蟻と共に野をこえて雲の峰の中にさ迷つていくのであらう。『つづきけん』と、推量と詠嘆をふくんだ座

五には、そのような夢がある。しかし、発想動機の微弱なためか、人の心を共に夢に引入れていくだけの力はない」。加藤『秀句』に、「蟻が蜿蜒と列をなしているのを蟻の道とか蟻の列とかいうが、一茶はその果てなくつづいている感じに、幻想的な恍惚を覚えたのであらう。この蟻の道はあの果てしなぬ雲の峰からつづいてきたのであらうというのである。『蟻の道雲の峰よりつづきけん』の自ら肯くやうな声調は弾力があって、『つづきけり』の平面的な冷たさよりずっとよい。蟻の道が雲の峰へ向かつてつづいているのではなく、雲の峰からつづいていたのだらうというところに味がある。気の遠くなるやうなはるかなものの中から生まれて、今この現実の一点を過ぎている蟻の道。この蟻の道はまたはるかな未知の世界を一茶に暗示しているのであらう。この遠近の無限なへだたりこそ、この句の魅力となっているものだ」。丸山『一茶』に、「まことに意表を突いた奇抜な表現である。遙か地平の果てに、ぼつりと白い雲の峰。えんえんと続く黒い蟻の列。しかもこの句では、雲の峰は小さく遠景に押しやられて、その画面の一番奥から出てきた蟻の列が、次第にクロース・アップされて、前面に大きくせり上がってくる。シネマスコープの一面でも観るやうな立体感がある。いわば大を小に小を大に、対象の尺度を強引に逆転させた所に、思い切ったデフォルメが施されているわけだが、この対象の不調和から、人を食った一種の諧謔味も生まれてくる」。前田『俳風』に、「暑い夏空のもとに黒い蟻

の列がえんえんと続いている。はるか地平線のかなたに入道雲が見えるが、あの雲の峰からここまで続いているのかもしれない。大きな素材（雲の峰）を小さく、小さい素材（蟻）を大きく逆転させて、同一画面に対照的に描いた奇抜な着想の句である。二つの素材は下五『つつきけん』によって接続し、『蟻の道』の最後部に虚空のかなたの『雲の峰』に続いているのであろうとする白昼夢には、幻想的な美しさがあり、一茶の詩質の多様さを示している」。